

宇治大納言物語の一側面

— 山門寺門の確執との関連から —

宮 田 尚

源隆国編と伝えられる宇治大納言物語については、これまで主として、説話文学展開史上の機構や、宇治大納言物語の、そこで果たした役割などを究明しようとする立場から考察が加えられてきている。宇治大納言物語は、周知のとおり、諸書のなかに化石化してとどめられている断片からして、説話文学の流れのなかで重要な位置をしめていたとみられる作品だけに、いわゆる説話文学の時代をあとづけるうえで、これはまずとりあげなければならぬ、主要な課題だといつてよい。

ただ、従来とられているこうした角度からの考察は、もともと、宇治大納言物語そのものの素姓を洗い出すことをめざしているのではなく、いわば、それをひとつの資料としてとりあげようという発想にもとづくものである。したがって、たとえばその性格や立場やといったもんだい——それはとりもなおさず、説話文学の流れをあとづけようとするとき、けっして座視することのできない意味をもっているはずであるが、とにかく、そうしたもんだいは、とうぜんの帰結として、死角に入ったまま、ほとんど顧られることもなく今日に至っているようにみえる。

宇治大納言物語の一側面 — 山門寺門の確執との関連から —

そこで本稿では、恣意的な推論に墮することをおそれながらも、宇治大納言物語の一側面について、あえてひとつの推論を試みることにしたい。

1

宇治大納言物語は、いまいうように、諸書のなかに化石化してとどめられている断片によって、わずかにその内容の一端を今日に伝えられているにすぎない散佚作品である。しかも、七大寺巡礼私記などの諸書に引用されたり、註記として付されたりしている十二点十一種の断片でさえ、正確にいえば、宇治大納言物語に、同話あるいは類話が収められていたことを示す記述を有する資料であるにすぎず、このすべてが、隆国編の宇治大納言物語にもとづいているとはかぎらない。宇治拾遺の序に示されているような事情によって派生したものであるかどうかはさておくとしても、隆国没後、複数の亜流宇治大納言物語と称された作品が世に行なわれていたらしいところからすると、このなかにも、隆国編の作品に似て非なる、亜流宇治大納言物語にもとづくものがふくまれている可能性があるわけである。

し、ことによると、全部がそうであるかもしれないのである。したがって本来なら、まずこの断片のひとつひとつを吟味し、隆国編の作品によっているものと、そうでないものを選別してかかる必要があるわけである。が、現段階ではそれは、ほとんど不可能に近い。

ただ、たとえそうした不確定要素があり、このなかに隆国編の宇治大納言物語にもとづいているかどうかのきわめて疑わしいものがまじっているとしても、それはそれとして、隆国編の作品が、そこにみられるような題材を、そこにみられるような角度からとりあげていたとしても不都合のない作品だと考えられていたことを示しているはずであり、したがってここから、宇治大納言物語の性格なり立場なりについての、ひとつの傾向をさぐることは可能であろう。

さて、こうした観点にたつて、十二点十一種の断片をひとわたり見渡すと、そこには、僧の験に関するはなしが四種あり、しかもそのうちの三種に余慶がかかわりをもっているという、きわめて興味ぶかい、題材上の、特徴的なかたむきのあることが知られる。僧の験に関するはなしとは、

(1) 園城寺伝記巻六に、 \wedge 宇治大納言物語曰 \vee としてかかげられている、空也の曲つたひじを、余慶が祈りなおしたはなし、

(2) 真言伝巻五の、陽生と円質とが験くらべをしたはなしの後に、 \wedge 宇治大納言物語ト云物 \vee として付されている、尋禪と余慶との

同趣の験くらべのはなし、

(3) \wedge 是ハ宇治ノ大納言物語ニ見ヘタリ \vee と奥書に註している曼珠院本是害坊絵詞の、余慶・尋禪・慈恵らに験くらべをいどんだ震旦の天狗が、かえってさんざんなめにあわされたというはなし、

(4) 異本紫明抄若紫巻に、 \wedge 宇治大納言物語 \vee としてかかげられている、閑院太政大臣のわらわ病を、持経者永口が祈りなおしたはなし、

の四種であり、(1)・(2)・(3)の三種に余慶がかかわりをもっている。

これはいったい、なにを意味しているのであろうか。

この現象の、それもとりわけ余慶のかかわりをもつはなしが三種みられる点は、宇治大納言物語が、余慶の周辺に関心を寄せる作品であったこと、少なくとも、そのような立場にたつ作品だと考えられていたことを、ばくぜんとながらもさし示しているといえはしないであらうか。

2

宇治大納言物語が、余慶に近い立場に立つ作品ではなかったかとの推測は、内容のうえからもいえるように思われる。その典型的な例として、右に(1)として例示した園城寺伝記のばあいを、いまい度とりあげよう。

普空也聖人。參^ニ一条太政大臣之亭^一。居^ニ藏人所^一。余慶僧正參會。僧正問云。御臂^{ヒシタルヲ}為^レ折^レ之由承及。其子細如何。聖人報曰。從^レ床落^レ地折^レ左。直右^ノ如^ク望^ニ。在^ニ加持^一云々。僧正曰。貴聖人也。為^ニ皇子^一之上。非^ニ凡人^一之賤。我護身加持欲^レ奉^レ直^ニ其臂^一奈何。聖人大喜近^ニ寄僧正^一之辺。其時殿中上下群集見^レ之。僧正平時^ハ加^レ持。片時^ノ之後。聖人。試^ニ延臂^一。則如^レ右屈伸無^レ煩。聖人自^レ眼流^ニ目連子^一許^レ之涙^一。起座^ニ三度礼拜^一之。聖人有^ニ弟子^一中第一弟子。以^ニ反古^一聖授^ニ与僧正^一文。

これが、園城寺伝記巻六に、八宇治大納言物語曰としてかかげられているのはなしの全文である。一見してあきらかなように、要するにこれは、一条太政大臣邸で空也と来あわせた余慶が、幼少のころ折って屈伸のままならなかった空也の左ひじを、半時ばかりの加持によって常態にもどし、いたく感謝されたというはなしである。

このはなしの類話は、打聞集、宇治拾遺、寺門伝記補録、元亨釈書などにも収められており、部分的には、たとえば、ひじを折ったいきさつが、母に投げとばされたからだと説明されているものもあるなど、所収の文献によって多少の相違がみられるものの、大筋に違いはない。文脈もほぼ一致している。つまり、どこまでもこれは、余慶の有験を讃嘆するはなしなのである。

説話が、異常なできごとに対するおどろきの文字であり、このはなしも元来、そうした興味に支えられているものであるとしても、一般的にいつて、はなしがはなしとしてひとつの作品に収録されるばあいには、そのはなしのとりあげていることからの性格ととも、だれに関するはなしであるかという点も、採否を決する重要な要素であったはずである。これを当面のもんだいに即していえば、宇治大納言物語がこのはなしをとりあげたのは、はなしとしてのおもしろさもさることながら、これが余慶に関するはなしであり、しかも彼の有験を讃嘆するはなしであることと、けっして無関係ではあるまいと考えられるのである。少なくとも、宇治大納言物語が余慶を忌避する立場にたつ作品であるならば、このはなしは、たとえはなしとしておもしろいものであったとしても、まずとりあげられることはなかつたであろう。

宇治大納言物語の側面 ― 山門寺門の確執との関連から ―

なお、園城寺伝記は、文献を引用するに際して、なるべく忠実にそれを引用しようという姿勢をもっていたように思われる。ちなみに、巻三に引用している後拾遺往生伝も、巻四に引用している扶桑略記も、現在伝えられているそれぞれの本文と、ほぼ完全に一致している。この事実を、長承三年（一一三四）以前に成立した打聞集に、これときわめて類似度の高いはなしが収められていることと考えあわせると、この資料的価値は、かなり高いといつてよいように思われる。かりに園城寺伝記の引用しているこの宇治大納言物語が、隆国編の作品ではないにしても、隆国の存命年代と打聞集の成立年代との近さからして、すでにこのはなしは、隆国編のその散在する以前に、世に行なわれていた可能性が大であると推察されるからである。

3

周知のように余慶は、智証流の旗がしらとして、いわゆる山門寺門の確執の渦中にあつた人物である。

山門寺門の確執は、天長十年（八三二）、第一世の天台座主義真が死に際して、弟子の円修に後を継がせるべく、院内の雑事をとりしきらせることにしたことに対し、最澄直系の弟子たちが反発して上奏するというかたちで端を発した。このときは、勅使がたつて私に座主を号した円修の職を停止したため、ひとまず事は落着いた。円修は山をおりて大和の室生寺に移り住み、翌承和元年（八三四）、最澄の高弟円澄が、第二世の天台座主の座についた。

以来、最澄系と義真系との両派は、それぞれ、円仁(慈覚)、円珍(智証)という強力な指導者をえ、表面的には、いちおう平静を保っていた。しかし、在位三十三年の長きにわたった第五世座主円珍以後、第九世の長意をはさんで、第十三世の尊意にいたるまでの前後七十余年間、義真ないし智証流が天台座主の座についている一方、第十四世義海以後、かわって慈覚流が座主の座を独占しているのは、おそらく両派の勢力関係の強弱によるものであって、その間には、かなりのあつれきがあったものと思われる。義真の後任人事をめぐる発生した両派の不和は、解消するどころか、時とともに着実に根をおろし、かえってぬきざしならない状態になっていったことを、この事実が物語っているものと解される。

こうした背景をもつ両派の対立が、いっしょに表面化したのは、天元四年(九八二)、園城寺の長吏であった余慶が、第十世の法性寺座主に任命されたときである。慈覚派は、初代以来自派から出ている法性寺座主に、智証流の余慶が任じられたことを不満に思い、そのむねを訴えたが、朝廷がこれを聞き入れなかったため、二十二名の僧綱阿闍梨が、百六十余名の衆徒をひきつれて関白邸におしかけ、乱暴をはたらくという実力行使の挙に出た。円融帝はこれを聞いて激怒し、彼らの職を封じた。険悪な気配のみなきるなかで、余慶は山をおりた。しかし慈覚派はおさまらず、智証門徒の一部が住していた千手院に焼き打ちをかけるなどして、攻撃の手をゆるめなかった。

天元四年の暮れから、翌年一月にかけてのこの騒ぎは、余慶が法性寺座主しりぞく一方、かさねての朝廷のいさめに、時の天台座主

良源が釈明したことで、いちおうおさまった。慈覚派は、名を捨てて実をとったわけである。しかしこの一件は、全盛をはこる慈覚派の自負心をいたく刺戟したに違いない。彼らにとつて余慶は、許すべからざる人物として目についたことであろう。

八年後の永祚元年(九八九)、両派の対立はふたたび表面化した。この年の九月、余慶が第二十世の天台座主に任命されたことがそのきっかけであった。またしても、余慶である。法性寺座主にさえ、智証派の人物であることを理由に、余慶の就任をこぼんだ慈覚派が、天台座主への彼の起用を容認するはずがない。慈覚派は、勅使の登山を實力によつて阻止する作戦をとり、二度にわたつてこれをはばんだ。三度めの勅使藤原有国がようやくにして山に登りえたのは、余慶の座主発令後、一か月たつてからであった。しかしなおも、慈覚派はこれを承服したわけではない。寺務はどここおり、混乱した。その結果余慶は、座主としての実質的な職務をなすにひとつなしえないまま、三か月後の十二月に、辞任せざるをえなくなった。在位三か月は、それまでに例のない短期間である。

以後、智証派の報復や、さらにそれに対する慈覚派の反撃などがくりかえされ、武力による対立抗争が一段と激しさを増していくことになる。天台座主も、余慶がしりぞいて五十八年後に、智証派から明尊が第二十九世として起用されるまで、慈覚派が独占した。ひさびさに出た智証派の明尊も、しかし三日でしりぞかざるをえなかったし、第三十一世源泉、第三十四世覚円、第三十九世増善、第四十四世行尊、第四十七世覚猷、第五十世覚忠と、散発的に任じられた智証派からの座主も、行尊の六日を最高に、二、三日ですべて座

主の座をしりぞいている。そのつど、慈覚派の激しい抵抗があったからである。慈覚派から出た座主が、没時までその職にあることをたてまえとしていることを思えば、その対立の根の深さと激しきとは、ぬきさしならない状態にあったことが推察される。

つまり余慶は、世紀を越えて末ながく尾を引いた山門寺門の確執の、要に位置した人物であり、引き金の役を果した人物なのである。したがって、慈覚派とその同調者にとっては、もつとも忌避すべき人物のひとりであつたらうとみられるし、逆に、不遇をかこつて、讚美すべき人物のひとりであつたらうとみられる。彼は、そういう立場にあるのである。

とするならば、宇治大納言物語が余慶の周辺に関心を寄せ、彼に近しい立場にたつ作品ではなかつたかとの右の推測は、宇治大納言物語が、智証派に関心を寄せ、智証派に親しみを感ずる立場にたつ作品ではなかつたかとの推測におきかえることができはしないか。

4

宇治大納言物語が寺門系に近しい立場にたつ作品ではなかつたかとの推測は、たとえば、七大寺巡礼私記所引の宇治大納言物語のばあいからもいえそうに思われる。

現在知られている宇治大納言物語の断片のうちで、所収文献の成立年次がもつとも古く、その意味で、いちおう信憑性が高いといつてよいかと思われる七大寺巡礼私記は、八宇治大納言物語同之Vと

宇治大納言物語の側面 — 山門寺門の確執との関連から —

して、興福寺の再建時にみられた三つの勝事を記している。第一は、興福寺再建の地が亀の甲状の丘陵地であつたため、壁土をこねる水に不便していたところ、突如として、すぐ近くから水がわき出たことであり、第二は、供養の日、曇っていて星が見えなかつたため、仏の渡来する刻限をはかりかねていると、つかの間だけ、堂の上の雲が切れたことであり、第三は、天蓋をつるす梁をあげ忘れて困惑していたところ、誤つてあげてそのままにしていた梁が、予定していた箇所と寸分違わぬところにあつたため、事なきをえたことである。

このうち、当面もんだいになるのは、第二の勝事である。

七大寺巡礼私記所引の宇治大納言物語も、これの類話である古本説話集第四十七話も、供養の日の奇瑞を語ることにねらいがおかれていて、事実関係についてはなにもふれていないが、記録類によれば、供養がとりおこなわれたのは、永承三年（一〇四八）三月二日のことであつた。供養は、関白左大臣以下の公卿列席のもと、南都北嶺の僧五百が参集して盛大におこなわれた。当日参会した公卿のなかに、隆国もいた。その他の公卿の名も、僧の名や役割りも、すべてあきらかにされている。

ところで、この日の導師をつとめたのは、じつは、五か月後の八月に第二十九世の天台座主に任ぜられ、三日でしりぞくことになる明尊なのである。明尊が当日の導師をつとめることになつたことこの理由のひとつには、あるいは、二十八世座主の教円が前年の六月に没して、空席のままだったということもあるかもしれない。だが、けつしてそれだけではあるまい。興福寺の造営が、頼通の熱心

な支援のもとにおこなわれたものである以上、とうぜんそこには、頼通の意向が強くはたらいたものと思われる。

七大寺巡礼私記所引の宇治大納言物語は、右にいうように八宇治大納言物語同之、Vなのであって、八日Vではない。したがって、そこにみられる記事と宇治大納言物語の当該話とが、まったく同じというわけにはいかないかもしれない。けれども、古本説話集にほとんど同じかたちはなしが収められているところからすれば、違いがあるにしても、さして大幅な違いではなかったのではないかと考えられる。おそらくこの第二の勝事に関して、明尊の名はかかげられていなかったであろう。

しかしかりに明尊の名がかげられていなかったとしても、またかりに、当日の奇瑞がはなしとして興味ぶかいものであったとしても、明尊がはれがましい導師をつとめた供養に関するはなしであって、採用するに堪えないはなしであったといえはしないか。

明尊は、長暦二年（一〇三八）九月、第二十七世天台座主慶命が没した後、次代の座主を望んで山門側の激しい反発を買い、ひと騒ぎ起している。そののみか、このとき任じられた教円が没した永承二年（一〇四七）六月、ふたたび座主望んで、山門側とのあいだに緊張関係を生ぜしめている。このときは結局、明尊の願いがかなうわけであるが、任命されるまでに一年二か月を要している。興福寺の再建供養は、この任命待ちの間におこなわれているのである。

なお、宣命はふつう、勅使がたつて山上で下すのであるが、明尊のばあいには左使でおこなわれ、大内記菅原定義とともに、隆国が

執行した。ときに隆国は、参議、権中納言であった。勅使の任にあたるのは、左右近衛少将、まれには右大弁が任じられたこともあるが、ふつう少納言であつて、参議、権中納言の例は、前にも後にもない。隆国はもちろん、公務としてその場に臨んだのであるが、こうした事実は、時の情勢が急であつたことを意味するとともに、あるいは彼が自ら買つて出たのではないかとも思われ、明尊、隆国のつながりをほのみせているようである。

今昔卷十二にある類話は、七大寺巡礼私記所引宇治大納言物語、あるいは古本説話にみるようなはなしをもととして、不足分を記録類で置きなつたものであろう。

5

園城寺伝記所引の宇治大納言物語に、余慶の引き立て役として登場している空也が、山門寺門の確執において、どのような態度をとつたかはさだかでない。教団の中枢から離れ、市井で熱心に布教活動をしていいたらしいところからすると、彼は、俗臭の強い両派の確執に、積極的に参加することはなかつたのではないかと思われる。が、それはそれとして、彼は延昌の流れをくむ人物であり、したがって、人脈からすれば、慈覚派につながる人物である。

このことから、このはなしが、両派の確執をなまのかたちで伝えているものではないにせよ、それを背景としてなりたつたものであることを思わせる。

さきに(2)としてかかげた真言伝所引の宇治大納言物語は、園城寺

伝記所引の宇治大納言物語のばあいと違って、山門寺門の確執を、より端的に反映していたものと思われる。すなわち、

或宇治大納言物語ト云物。慈恵僧正ノ前ニテ。尋禪余慶兩僧正ノ
独古ケアヒテ。験クラヘノ事有トカケリ。此事ニ相似タリ。独古
ノ験クラヘ。サノミ侍ラソト。イカハ。異説ヲ尋ヘシ。

との註は、陽生と円賀とが、関白に求められて、碁盤の上で独鈷に蹴あいをさせる験くらべのはなしの後に付されているわけであるが、尋禪はいうまでもなく、慈覚流で、第十九世の天台座主になった人物である。彼の五年の在任期間は、法性寺座主を追われた余慶が、つかの間の天台座主に任ぜられるまでの間に位置し、余慶は、彼の後を襲って第二十世の天台座主になったのであった。彼らが、それぞれ相手に対して、個人的にはどのような感情をいだいていたにせよ、対峙する関係にある両派を代表する人物である以上、独鈷の蹴あいの験くらべにしのぎをけずったというはなしが、両派の葛藤と無関係ではありえない。

もんだいは、このはなしで、尋禪、余慶のどっちが勝ったことになつてはいたのだが、惜しむらくは、あまりにもかんたんな記事であるため、いずれとも決しがたい。△此事ニ相似タリ▽という陽生と円賀のばあいにおいては、陽生が勝ったことになっている。陽生は、余慶に次ぐ第二十一世の天台座主になった人物で、もちろん慈覚流。円賀は、阿婆禪抄伝法灌頂日記によれば、尊意より印信を授かつているから、智証系の人物といえようか。とすれば、尋禪、余慶のばあいにも、慈覚流の尋禪が勝つたはなしだったともいえそうである。が、元亨釈書の円賀の項にみられる類話では、逆に、円賀が

勝つたことになっている。

6

宇治大納言物語が伝えられるように隆国の編であるならば、頼通、隆国と園城寺との関係から、それが寺門系に近い立場にたつ作品ではなかったかと推定することは、じゅうぶん可能である。かつて永井義憲氏は、今昔の編者が隆国であるとの立場にたつて、そのような推定をされたことがある。今昔の編者に隆国を擬するかぎり、その説には賛成できないけれども、氏への反論を呈した際ふれておいたように、宇治大納言物語の断片からは、以上のようなしだいで、それが寺門系に近い立場にたつ作品であつたらう、と考えられるふしがみられるといつてよいように思われる。

なお、選集抄にみられる園城寺伝記所引宇治大納言物語の類話が、余慶とあるべきところを、同じ智証流の行尊としているのは、行尊が第四十四世の天台座主になっていることでもあり、両者が似かよつた立場にあるために生じた混同であろう。